

上江洲安亭¹

I. はじめに

沖縄美ら島財団所蔵の森政三コレクションに残される首里城及び王府の重要施設の古写真・絵図について紹介を行いたい。コレクションの中には、「首里古地図」(参考1。沖縄県立図書館所蔵。以下、県図古地図と略す)や、戦前鎌倉芳太郎が撮影した「首里古地図」(参考2。沖縄県立芸術大学所蔵。以下、鎌倉古地図と略す)と同系統の絵図を撮影した森政三コレクションの古写真(写真1~3。以下、森古地図と略す)が残されている。おそらく、この森古地図の撮影画像は、「首里城並圓覺寺辯才天堂附近ノ國寶指定参考資料繪圖」(写真4。以下、国宝参考古地図と略す)の元図ではないかと考える。国宝参考古地図は、昭和初期に首里城正殿・円覚寺・守礼門等が国宝指定時の参考資料として作製されたと思われる。さらに国宝参考古地図を複写した青写真(写真5)も残されている。また、東京大学史料編纂所所蔵の「首里城並諸方絵図間付差図帳」(以下、差図帳と略す)と類似する円覚寺、玉御殿・大美御殿、崇元寺の絵図を撮影した古写真も残されている。

これらの絵図は、すでに伊従勉氏²、安里進氏³により琉球の測量法に関する考察に活用されている。また類似の東京大学所蔵の差図帳については黒嶋敏氏が模写に至った経緯を紹介している⁴。

本稿では、森政三コレクション中の首里城及び王府の重要施設に関する絵図の古写真と昭和初期に作成された図面・青写真の特徴の紹介と、諸模写本との比較を行う。特に首里古地図に関しては、現存する県図古地図と古写真に写し出された古地図の比較だけでなく、さらに前近代に作製された原図が、戦前には存在していた可能性も検討してみたい。

II. 「首里古地図」系統の古写真・図面・青写真

森政三旧蔵の古写真は、沖縄美ら島財団(以下、当財団)所蔵のコレクションに含まれない資料も多数存在し、これまで幾つかの刊行物等にも紹介されていた⁵。首里城跡に関する

1 沖縄美ら島財団首里城公園管理センター首里城事業課副参事(博士(芸術学)・学芸員)

2 伊従勉「新発見の「首里古絵図」の測量法について」(『民族藝術』VOL.23 2007年3月)

3 安里進「首里王府の重要施設絵図調製事業」(『首里城研究』No.15 首里城研究会 2013年3月)

4 黒嶋敏「史料紹介と研究「首里城並諸方絵図間付差図帳」について」(画像史料解析センター通信第90号 2020年10月)

5 『写真集 沖縄 ●失われた文化財と風俗』(那覇出版社 1984年9月)

絵図面としては、「首里古絵図」が知られており、首里城跡内の復元整備でも活用されてきた（伊従 2007）。「首里古絵図」を撮影した古写真は、当財団収集の森政三コレクションには含まれていない。しかし、本コレクションには、沖縄県立図書館所蔵の県図古地図系統の絵図を撮影した森古地図と、その首里古地図系統の模写本となる国宝参考古地図、さらに国宝参考古地図を複写した青写真が残されている。この首里古地図系統の古写真と模写本等について言及する。

(1) 森政三コレクションの「首里古地図」写真

森古地図は3枚の撮影範囲が異なる写真で画像が残されており、写真1は、ほぼ地図全体を撮影した画像となっている。地図の北側と西側は、県図古地図（参考1）と同じ部分まで撮影されている。東側と南側がやや途切れ撮影しきれていない。全体を撮影しようとした結果、左右（東西）、下部（南）は露光不足で画像が明確ではない。しかし町方の村屋敷図の記述が判別でき、首里古地図系統の地図であることが分かる。

写真2は、地図中央部分を撮影した写真で、首里城及び当蔵村を中心とし、北側は山川村、桃原村、儀保村、赤平村・汀良村、東側は鳥堀村の一部、西側は真和志村から山川村の一部、南側は金城村が撮影されている。金城川以南は途切れている。

写真3は、さらに城郭周辺に絞って撮影しており、首里城及び周辺の円覚寺・弁財天堂・龍潭・守礼門等が写っている。正殿前に「御城」と表記があり、唐破風は一間。基壇中央階段は八の字に広がっている。写真の裏に、おそらく森政三が鉛筆で書いたメモがあり、「首里市古圖（原圖は、約二百五十餘年前ノ圖）モト首里市役所旧蔵 戦災の焼失 この写真は王城の附近だけ」とある。

森古地図は、写真1～3の画像から、首里三平等の村屋敷図が表記されており、正殿を含めた城郭内の絵図も県図古地図と同じである。ただ現存する県図古地図を撮影した画像ではなく、鎌倉古写真に撮影された絵図と同じ可能性が高いと思われる。

根拠を挙げると、鎌倉古地図（参考2-1）と森古地図（写真3-1）を比較すると、双方とも円覚寺から首里城東（あがり）のアザナへ斜めに折れが延びている。破損部分が同じ絵図を撮影したものと思われる。県図古地図には同じ個所に後世修理痕は無い⁶。

他の部分も比較すると、森古地図の首里城城郭内画像（写真3-2）の絵図の折れや、修理痕が県図古絵図（参考1-1）と相違している。森古地図は、修理の折れ跡が円覚寺境内から

森政三が旧蔵していた沖縄関係古写真を掲載した代表的な書籍の一つ。発行者の那霸出版社が廃業しているため、掲載写真の原板の多くは所在不明である。

6 沖縄県立図書館に問い合わせたところ、県図古地図は、1984年3月31日に修理を行った記録が残されているとのご教授を得た（『沖縄県立図書館100周年記念誌』（沖縄県立図書館 2010年12月））。1983（昭和53）年度に修理事業があったということであろう。復帰前の琉球政府立中央図書館、財団法人東恩納寛淳文庫所蔵期の修理の履歴は不明とのことである。

外れた絵図上方（北側）に横（東西）に走っており、弁財天堂上方（北側）に汚れがあるよう見える（写真 3-3）。県図古地図は、円覚寺境内の中、三門・方丈池・総門を走り（東西）、弁財天堂の天女橋をかすめるように修理痕があり森古地図と相違する。さらに県図古地図は写真 3-3 と同じ場所に汚れは無い（参考 1-2）。

絵図の描写表現でも相違がある。龍潭下方（西側）の樹木群（ハンタン山）の樹木の描写は、森古地図、県図古地図共に、ほぼ同じ数量と配置で描かれているが、森古地図は樹木を描いた後、樹形を量した描写を行っている（写真 3-3）。この量し表現は、鎌倉古地図（参考 2・参考 2-1）にも認められるが、県図古地図の樹木は葉を点描で明確に描き、量し表現が無い（参考 1-2）。このように汚れ、後世の修理痕、樹木表現等の特徴に相違があり、森古地図は、現存する県図古地図とは別の写本の画像であることが分かる。このため森古地図は樹木表現が類似し、修理痕が同じ画像として撮影されている鎌倉古地図と同じ絵図ではないかと考える。県図古地図は、1910 年（明治 43）に東恩納寛淳の依頼により具志氏により模写され、東恩納が所蔵していた⁷。鎌倉芳太郎が首里古地図を撮影したのは 1924～25 年（大正 13～14）と思われる⁸。森古地図が撮影されたのは、森政三が来沖した 1936 年（昭和 11）頃までに撮影されたものと思われる。県図古地図の模写時期とは 20 数年、鎌倉が古地図を撮影した時期とは 10 数年後の撮影画像であると思われる。また森は文部省技官であったことから、写真撮影は鎌倉と違い、写真技師に委託撮影させた画像を所有していた可能性もある。森が来沖するさらに前、国宝指定に伴う諸調査で別途写真技師が事前に撮影していたことも考えられる。その場合、鎌倉古地図と森古地図の撮影時期は約 10 年弱しか離れておらず、当時の沖縄県の文化財の保存事業が、首里城正殿や守礼門等のように日本政府頼みであることから、その間に修理が行われた可能性は低い。実際修理に関する記録も残されていない。森古地図は鎌倉古地図と同じ絵図である可能性は高い⁹。鎌倉古地図と森古地図が同じ絵図で、県図古地図が別であった場合、新たに別の検討課題が浮かび上がる。この鎌倉・森古地図は、何時作製されて、戦前どこに所蔵されていたのか。この疑問点の手がかりの一つとして、鎌倉・森古地図の樹木の量し表現ではないかと考える。査丕烈（仲宗根眞補）が 1894 年（明治 27）に描いた「首里舊城之圖」（参考 3）の首里城周辺の樹木の描写表現が鎌倉・森古地図の樹木の量し表現と類似している（参考 3-1）。後述するが王府は絵図を作製する場合、測量技術者だけでなく、貝摺奉行所の絵師も参画させて絵図の精度を担保し、色分け等の表記の工夫を行っていた。貝摺奉行所所属の絵師達は、漆器等の工芸品の図案、献上用

⁷ 東恩納寛淳「地図」（『南島風土記』 沖縄文化協会沖縄財団 1950 年 3 月）

⁸ 豊見山和行「首里古地図」解説（『琉球国絵図史料集 第三集一天保国絵図・首里古地図及び関連史料一』 沖縄県教育委員会 1994 年 3 月）

⁹ 鎌倉古地図と森古地図が同じ画像で、現存の県図古地図が別の模写だったと考えるが、両図とも、原図を正確に模写することを目的とし、原図の修理痕も謄写する現状模写の考え方で複製に臨んでいたと思われる。

「古地図の概要・沖縄県立図書館 貴重資料デジタル書庫」

（<https://www.library.pref.okinawa.jp/archive/contents/cat39/oldmaps.html>）

の絵画製作を行っていた。貝摺奉行所のような工房製作の特徴として、伝統的に受け継がれた表現を踏襲することがあり、絵画の主題の図案は絵師個人の個性が表れるが、鳥瞰図や山水楼閣図の樹林部分や、漆器図案等の幾何学的な模様等の画題から外れた部分の表現は絵師個人の個性よりも、工房で引き継がれてきたテンプレートな表現を踏襲することが多い。前近代に貝摺奉行所の絵師だった査不烈の「首里舊城之圖」の樹木表現との類似性から鎌倉・森古地図は、貝摺奉行所の絵師が関与した模写本ではないかと思われる。後述するが、王府は業務上、必要な場合、絵図の模写を行って複数の部署で所持していたようなので、鎌倉・森古地図の作製の上限は王府が機能していた 1879 年（明治 12）以前の可能性が高い。鎌倉が 1924～25 年頃に撮影した段階で修理を行った痕跡があり、作製当初から、かなり時間が経過していることからも伺える。どこに保管されていたかという問題は、1924～25 年に鎌倉が撮影し、1933～36 年頃に森が撮影していることから、割と所在が知られた場所で実見の申請許可が下りやすかった環境であったと思われる。実際、写真 3 の裏に、森のメモで「首里市古圖」、「モト首里市役所旧蔵」とある。鎌倉・森が撮影した首里古地図は、首里市役所にあったようだ。

(2) 「首里城並圓覺寺辯才天堂附近ノ國寶指定参考資料繪圖」及び青写真

写真 4 が、図面として残される「首里城並圓覺寺辯才天堂附近ノ國寶指定参考資料繪圖」（国宝参考古地図）である。彩色されており、森古地図の写真 3 に近い範囲で表記されている。標題の通り、国宝となった首里城跡（城郭内の歓会門・瑞泉門・白銀門含む）、守礼門、園比屋武御嶽石門が含まれた範囲を参考資料として当時の文化財行政の業務上、必要としたために既存の首里古地図を活用して作製された地図なのであろう。国宝となった史跡の確認のため作製された地図であることから首里古地図にある屋敷図部分の表記は省略されたと思われる。また絵図の描写は首里古地図を踏襲しているが、弁財天堂の北側が「現師範学校」、円覚寺の北側が「現工業学校」、天界寺の境内の樹林部分に「現記念運動場」と図示はせず、文字表記だけで近代の情報を示している。

作製時期は「附近ノ國寶」とあることから、歓会門・瑞泉門・守礼門・円覚寺・園比屋武御嶽石門が国宝指定された 1933 年（昭和 8）以後、森政三が来沖した 1936 年（昭和 11）頃までではないかと思われる。これも国宝の保存修理事業等での必要性から森政三来沖前には作製された可能性はあると思われる。国宝参考古地図は、首里古地図の模写が目的ではなく、首里古地図をベースに首里城跡を含めた国宝史跡の確認のために作製されたものと思われるが、地図として表記された部分は鎌倉・森古地図や、県図古地図とほぼ同じで、正確に模写されているといえる。ただ樹木の描写は葉を描いた後に暈し表現が用いられており、県図古地図と相違し、鎌倉・森古地図と類似している。これは国宝参考古地図が、1910 年に模写された県図古地図ではなく、先述の通り、戦前の首里市役所の首里古地図を撮影した可能性の高い鎌倉・森古地図もしくは、同じ系統の模写本を基にしたものであったからであろう。青写真が作製されているのは、国宝参考古地図を基に国宝指定及び修理の関係者に

業務用として複写したものだと思われる。

(3) 各古地図の画像の比較検討から見る模写の系統

戦前、首里古地図は、首里市役所に所蔵されており、これを模写させた東恩納は、他の模写本が存在する可能性を指摘している。また末吉麦門冬の父が、平等所の役人を行っていた時に、備え付けられていたとの証言を紹介している（東恩納 1950）。他にも真境名安興は、「同所（首里市役所）で旧藩庁の古図から謄写したものであろう」と指摘している¹⁰。先述の通り、首里市役所所蔵の首里古地図の模写は、撮影された鎌倉・森古地図のようだ。それでは「旧藩庁の古図」と真境名が記した原本は、どこに保管されていたのだろう。結論を先に述べると黒嶋氏が経緯を紹介した森谷秀亮が作製した差図帳の原本を保管していた尚家ではないかと思われる（以下、尚家古地図と略す）。その可能性の一つを紹介すると、森政三も、鎌倉芳太郎のように沖縄調査中及び、その前後のことと備忘録として記録している（写真 9）。野帳タイプのノート六冊に記されており、沖縄の歴史文化や、調査時に見聞したことを記録していた¹¹。このノートは個人所蔵で、筆者は閲覧する機会に恵まれたが、その中に（写真 10）、

尚家所蔵 首里弣ノ古圖、首里市蔵ノモノト同様デアッテ市蔵ノモノノ原本ト思ハル？

※訂正線は、原本では市の上に×を書いている。

とあり、首里市役所蔵と同じ古地図が尚家に存在していた可能性を示している。

またノートの別の記録に（写真 11）、

○首里古圖

○世持矼、寛文元年（昭一八ヨリ逆二八三）ニ龍潭ニ移築

○安國寺、延寶二年（昭一八ヨリ逆二七〇）東宮ノ南地ニ移ス

○円覺寺鐘樓 延享元年（昭一八ヨリ逆二〇〇）放生池畔ヨリ現地ヘ移ス

とあり、「首里古圖」と記録した地図の世持橋、安国寺、円覺寺鐘楼についてメモを残している。このうち、安国寺については延寶 2 年（1674）に「東宮ノ南地ニ移ス」とある。東宮南側とは、首里古地図が作製された 18 世紀前半の中城御殿と安国寺の位置関係と一致する。首里市役所にあった古地図を写真撮影していることから、元になった地図の所在にも関心を示していた可能性は高い。「尚家所蔵 首里ノ古圖」が絵図帳であった首里古絵図系

¹⁰ 真境名安興「古地図より見たる首里」初出 1917 年（『真境名安興全集』第二巻所収 琉球

新報社 1992 年）

¹¹ 上江洲安亭「戦前を伝えるノート」（『工芸 青花』8 新潮社 2017 年 8 月）

統の写本を指すのであれば、首里城の城郭内しか図示されていないので、世持砦・安國寺・円覺寺鐘楼等の城郭外の石橋・寺院の指摘はできない。森ノートにある「首里ノ古圖」、「首里古圖」とは、戦前の尚家にあるとされた首里古地図系統模写の伝聞情報と首里市役所所蔵の地図の表記を見たうえで、ノートに記録を残したのではないかと思われる。

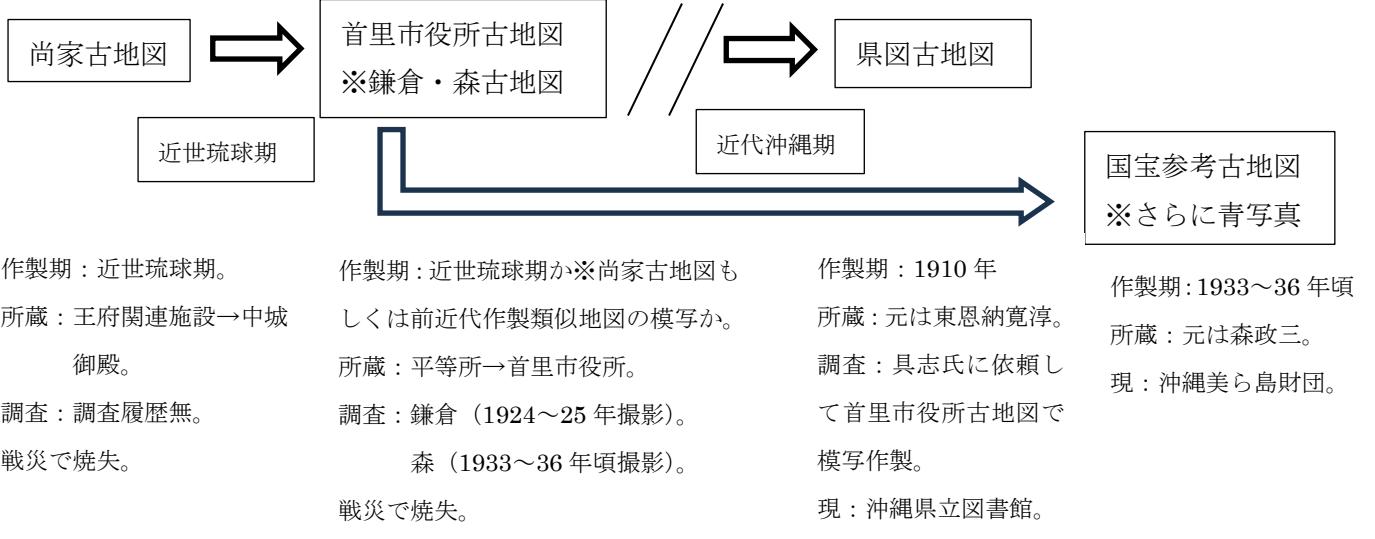
ただし尚家にあったと思われる首里古地図の原本まで実見できた、もしくは森古地図や、それと同じ鎌倉古地図が尚家の原本の撮影した画像であった可能性は慎重にならざるを得ない。確かに森は沖縄滞在中に尚家の沖縄の拠点である中城御殿の調査を行っている。建物の屋内外、石灯籠等を撮影しており、「中城御殿御普請板図」のような板図だが、中城御殿移転当初の図面を記録した重要な史料も撮影している¹²。

それでも黒嶋氏の指摘の通り（黒嶋 2020）、維新史料編纂官であった森谷でさえ、事前に「複数の縁故を頼って調整を試み」、入念な根回しを行って、ようやく調査を行っている。文部省技官の立場にあった森政三でも、建物の撮影と違い、保管場所から写場と設定した場所まで尚家の関係者に史料を移動してもらい、撮影しなければならない文書・絵図類は容易に閲覧できなかつたのではないか。そのため先述の通り、森古地図は首里市役所所蔵の絵図であったと思われ、森が沖縄滞在中の文化財の聞取調査で、先述の通り、その原本は尚家にあるらしいことを情報として得て、ノートに記したものと思われる。

これまで真境名が「旧藩庁の古図」とした首里市役所所蔵の首里古地図の原本について所在を示唆する記録はなかったが、森政三のノートから戦前の尚家に所蔵されていた可能性が高くなったのではないかと考えている。

本項で試みた首里古地図に関する模写本の関係性の考察が複雑になったので、これまで述べたことを下記の表1として整理してみた。参照してほしい。

表1 首里古地図模写本の系統図



¹² 新垣裕之 伊良部一史 上江洲安亨 新里涼子「中城御殿御普請板図の翻刻」（『首里城公園管理センター 調査研究・普及啓発事業年報』第2号 2012年3月）

III. 重要施設絵図の古写真

森政三コレクションには王府の重要施設の絵図面も残されている。この絵図面は、既に伊従氏・安里氏に紹介され、東京大学所蔵の差図帳との比較研究がなされている（伊従 2007・安里 2013）。

内容は、「円覚寺弁財天堂絵図」（写真 6）、「玉御殿・大美御殿絵図」（写真 7）、「崇元寺絵図」（写真 8）の三枚で、写真 6・8 は伊従・安里論文でも考察がなされている。

「円覚寺弁財天堂絵図」は、絵図帳の見開きで円覚寺と弁財天堂を図示している。絵図帳を綴じた部分に割り印がなされていることが特徴である。「玉御殿・大美御殿絵図」や、「崇元寺絵図」には割り印は無い。そのため「円覚寺弁財天堂絵図」は別の絵図帳で、前近代に王府が作製した絵図帳の可能性がある。

撮影された画像も写真 7・8 は虫損が激しく、裏打ちを行った修理痕がある。写真 6 も修理痕はあるが軽微で、撮影画像の紙の質感が相違している印象を受ける。写真 6 と写真 7・8 は同じ差図帳の模写であるが、別本ではないだろうか。

また東京大学所蔵の差図帳が尚家所蔵の模写本であることから（黒嶋 2020）、首里古地図の項で述べた通り、森政三が撮影した差図帳系統の王府の重要施設絵図は、尚家所蔵だけではなく別の模写本が戦前複数存在し、そのうち、最低 2 種の写本の一部について、森は撮影していたものと思われる¹³。そのため、安里氏が指摘している通り（安里 2013）、写真 6 と東京大学所蔵の差図帳の「円覚寺弁財天堂絵図」の建物・橋の描写や寺院内の棟数に相違があるのではないか。写真 6 と東京大学所蔵の差図帳の原本である尚家本は同じ前近代に作製された絵図であるが、年代が違う時期の建物を図示した絵図帳ではないか。写真 7・8 は差図帳との相違は少ないので、原本の尚家本と同じ年代の建物を写した別の模写本と思われる。

IV. まとめ

森政三が文部省技官として調査を行った関係資料は、伊従氏が紹介している通り（伊従

¹³ 前近代で、重要な絵図面・地図の模写を行うことはあった。鎌倉芳太郎は、毛文達小波蔵安章の履歴について、「咸豐 12 年（1861）30 歳の時、御評定所並びに田地方御格護の図面に基づき、これを写し取り段々に彩分けして、御当国惣圖一通、八重山島の図一通を作る。」としている。鎌倉の著作の記述で原史料に基づくものではないが、御評定所（北殿）や田地方と複数の部署に保管されていた図面から模写及び彩色による色分けを行い、琉球総図と八重山島の図を完成させたとある。必要に応じ、地図や重要施設の絵図面は模写され、王府の複数の部署で所持していたものと思われ、近代になると基本は尚本家の沖縄の拠点である中城御殿に集積していくが、別に保存・所持する機関・個人もあったのではないか。

鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（岩波書店 1982 年 10 月）

2007)、「首里古絵図」のように森政三本人ではなく他機関にも残されているようであった。当財団所蔵の森政三コレクションも、森が生前調査を行った資料の一部でしかない。このように森政三が戦前調査を行った資料（古写真・絵図・拓本・ノート等）は、戦後、散逸して所在不明になったものもあり、現存する資料も分散して残っている状態である。

分散していることで調査研究が困難な側面もあるが、まずは現存していることで分析・考察する余地が、まだあることを奇貨としたい。

本稿で取り扱った首里古地図系統の写真画像（森古地図・鎌倉古地図）や近代に作製した県図古地図・国宝参考古地図の分析で、森政三撮影の古地図と鎌倉芳太郎撮影の古地図は同一で、森古地図の写真3の裏に書かれたメモから首里市役所にあった地図であったことが明らかとなり、修理痕や樹木の描写表現により、県図古地図と、鎌倉・森古地図は別の絵図であることが分かった。森政三の調査ノートの記述から、真境名安興が「旧藩庁の古図」とした首里古地図系統の原本が戦前、尚家に所蔵されていた可能性があることも指摘できた。

本コレクションの重要施設の絵図を撮影した写真は、伊徳氏・安里氏が比較考察の通り、東京大学所蔵の差図帳と同系統の写本であるが、「円覚寺弁財天堂絵図」（写真6）は、絵図帳の綴じ目に割り印があり、王府が作製した前近代の絵図帳の可能性が高い。東京大学所蔵の差図帳とは建物の描写が相違しており、原本である尚家本とは、違う時期の建物を図示した差図帳の可能性がある。また一緒に残っている玉御殿・大美御殿絵図（写真7）、崇元寺絵図（写真8）は割り印が無く、写真6と写真7・8は修理痕の状態の様子も異にすることから、同系統の差図帳であるが違う模写本ではないかと思われる。

当財団が所蔵している森政三コレクションの首里城古地図系統の古写真・模写本、重要施設絵図について、一部先行研究で取り上げられた画像も含めて紹介してみた。研究年報に掲載することで、多くの研究者の目にとまり、調査研究の契機になれば幸いである。特に本コレクションの古写真は紙焼写真しか残っていないため、高精細撮影等の画像を分析する基礎的な調査が進めば、研究の進展の余地は、今後まだ大いにあると考えている。

図 版



写真1 「首里古地図」 全体画像写真（沖縄美ら島財団所蔵）
紙焼写真として残されている。露光不足で絵図周囲の画像は不鮮明となっている。



写真2 「首里古地図」 中央部分写真（沖縄美ら島財団所蔵）
写真1を中心部分に絞って撮影して画像。撮影部分を絞っているが、絵図の下半分（南側）は、露光不足となっている。周辺地域が三平等の村屋敷図となっており、県図首里古地図と同系統の絵図であることが分かる。

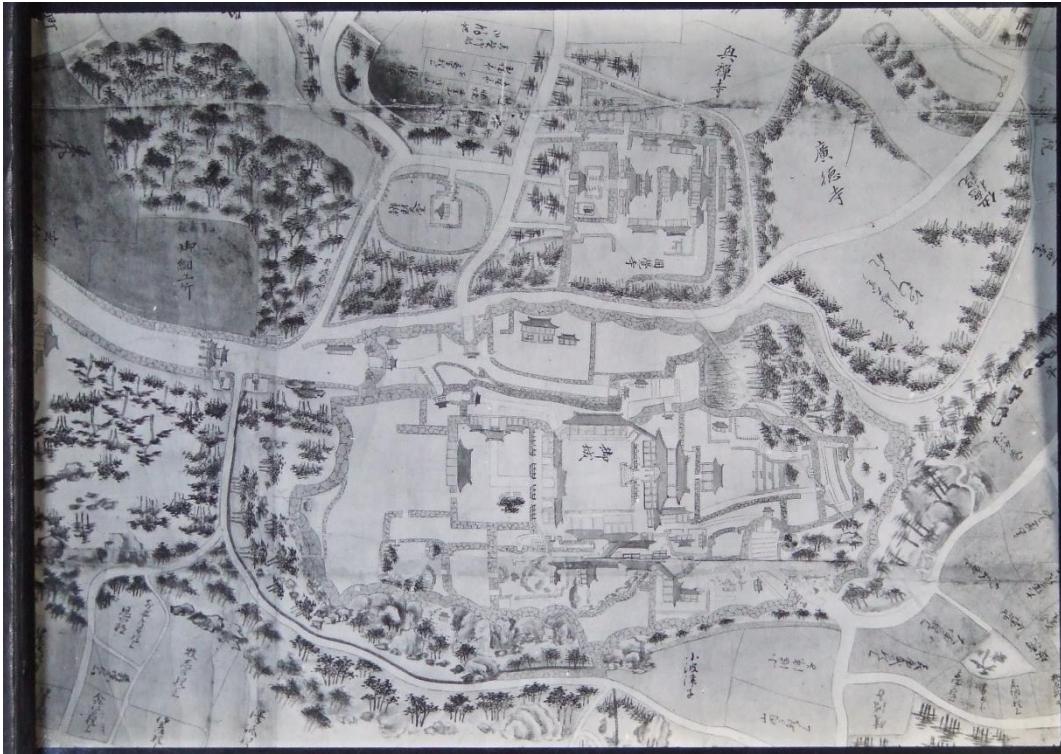
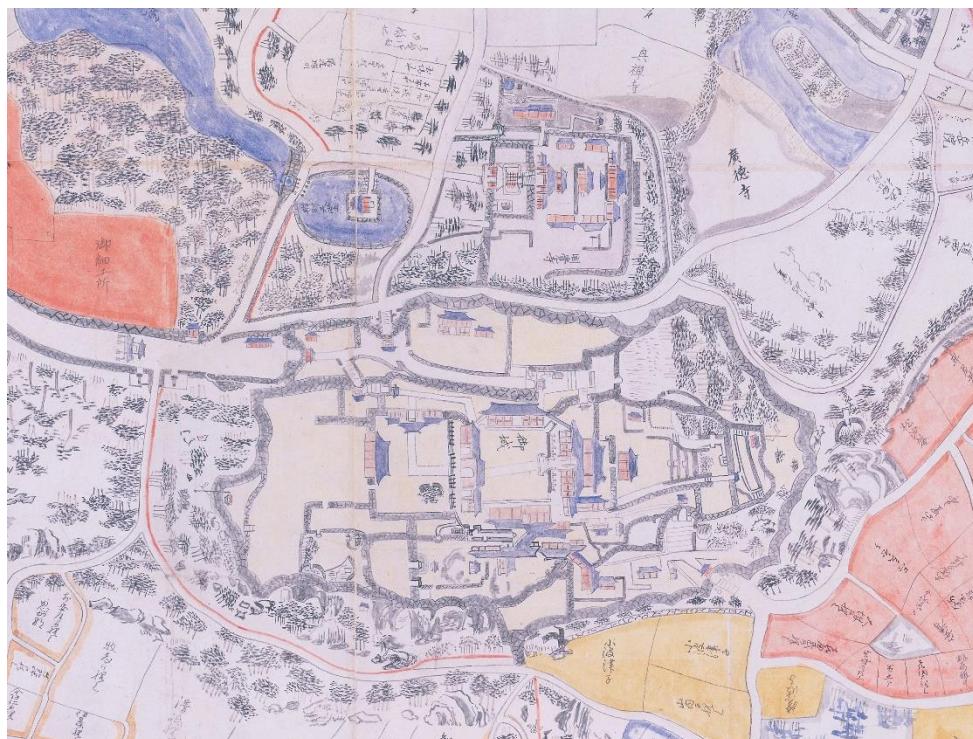


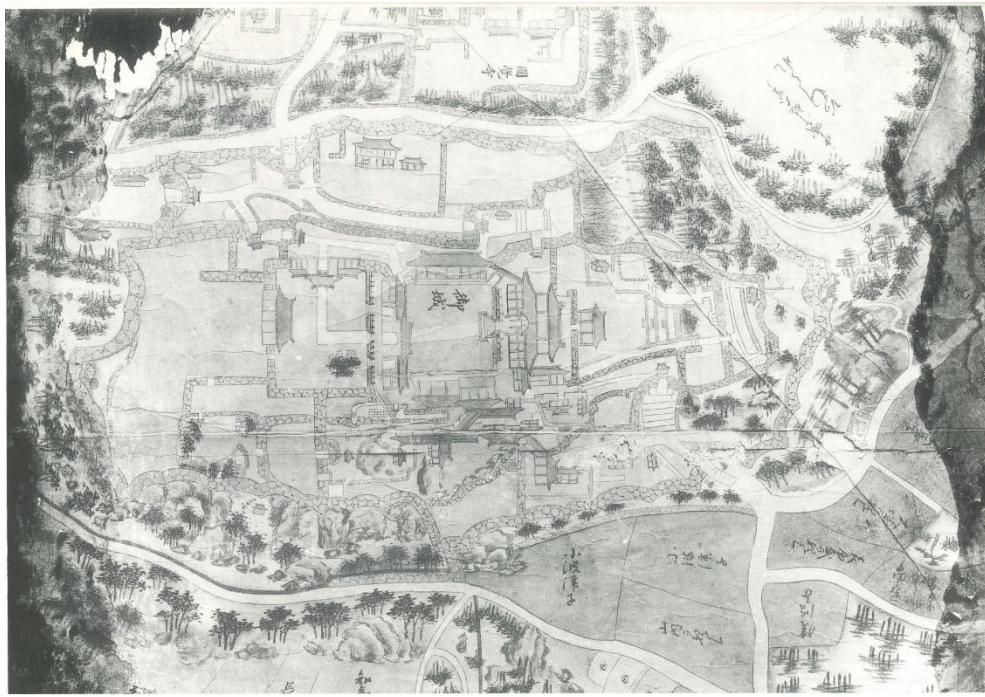
写真3 「首里古地図」 首里城部分写真（沖縄美ら島財団所蔵）

写真1を、さらに首里城周辺に絞って撮影した画像。御庭部分に「御城」の表記があり、唐破風は一間。基壇中央階段は八の字に広がっている。図示された首里城を含めて県図首里古地図と同系統の絵図であることが分かる。



参考1 「首里古地図」 首里城部分拡大写真

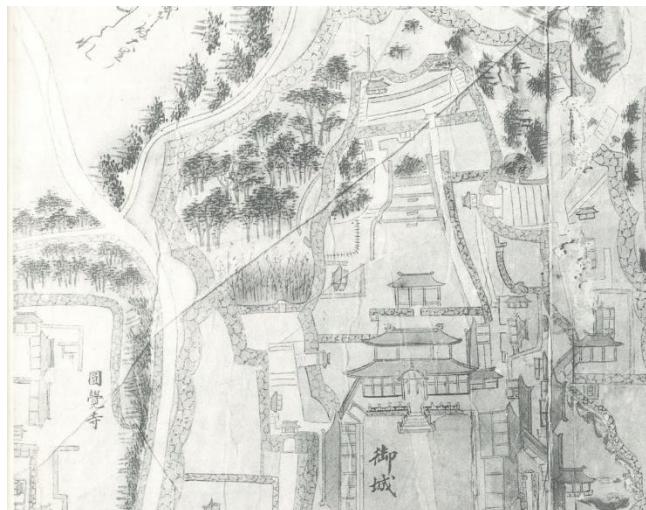
(沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0 (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>))
写真3と同じ部分を首里古地図から抜粋した。建物の形状や施設等の図示はほぼ同じ。



参考 2 鎌倉芳太郎撮影「首里古地図」 首里城部分写真

(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵)

写真 3 の森古地図と折れ等の劣化部分が同じである。樹木の描写も量し表現があり写真 3 と同様である。撮影時期は相違するが、同じ絵図の画像であると思われる。



参考 2-1 鎌倉古地図の修理痕

写真 3-3 と同じ個所に斜めに折れが延びて
いる

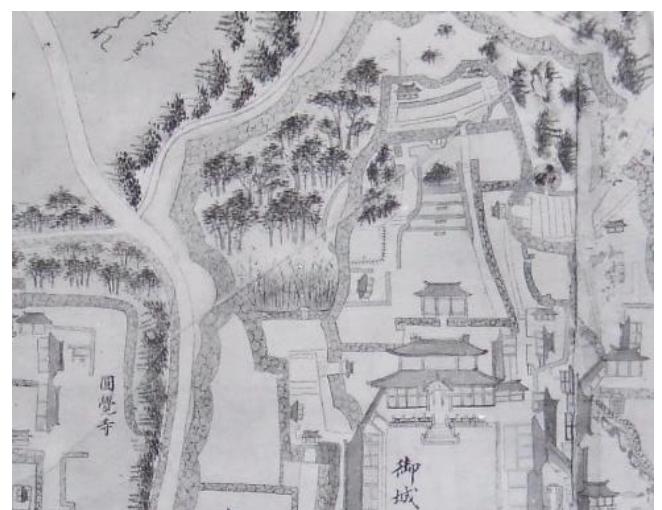
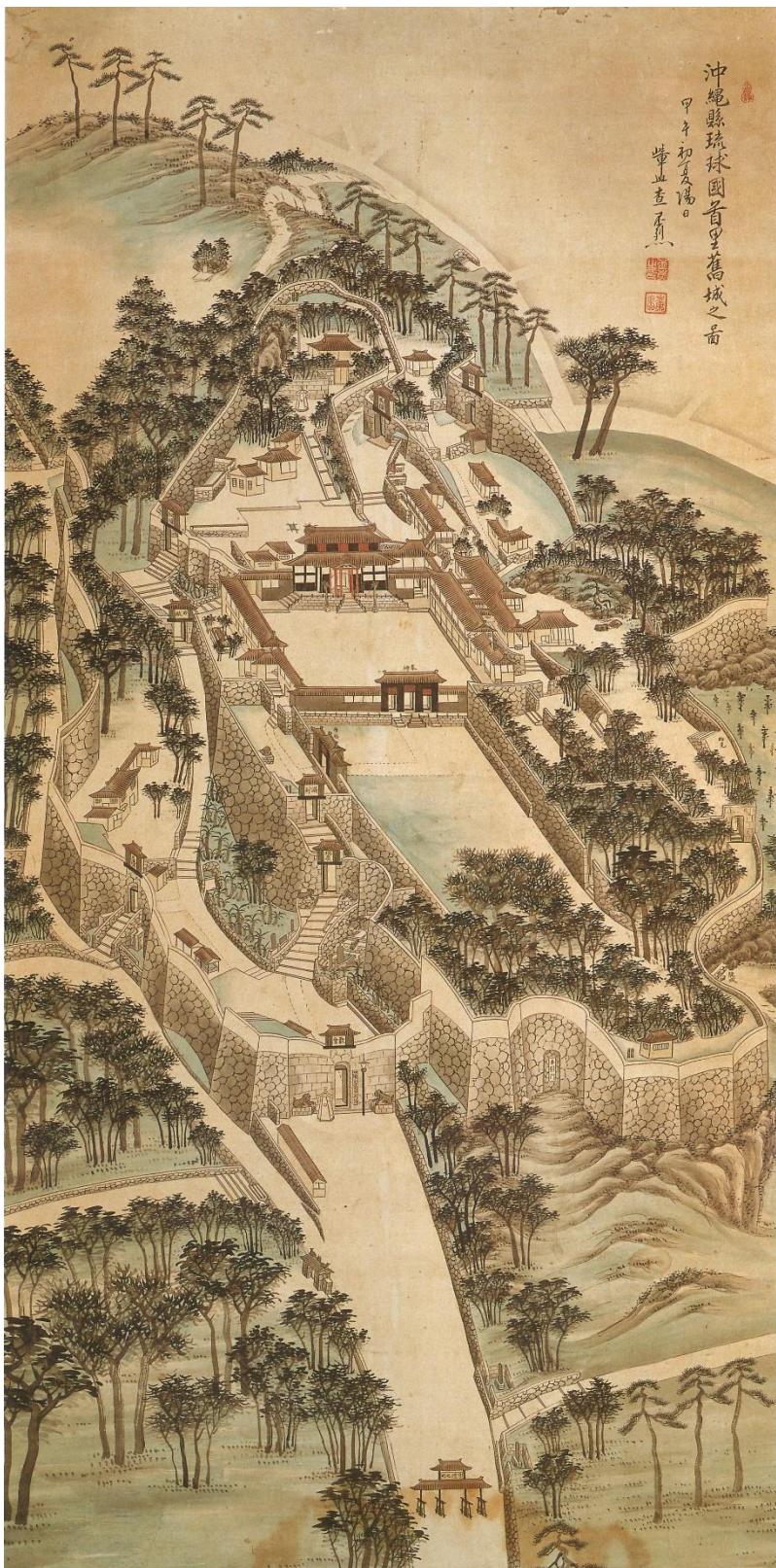
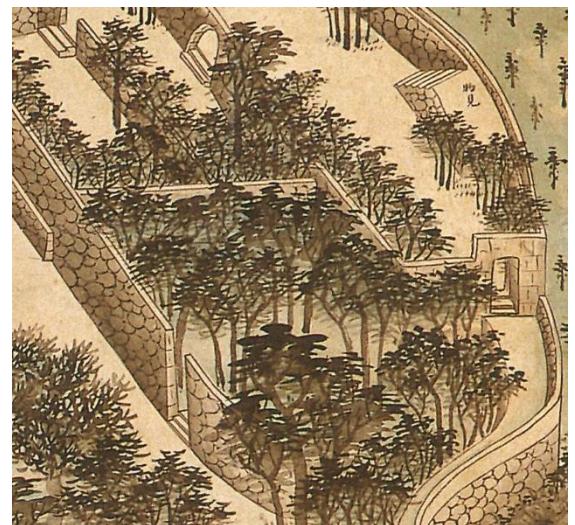


写真 3-1 森古地図の修理痕

円覚寺から首里城東のアザナへ斜めに折れ
が延びている



参考 3 「首里舊城之圖」
(沖縄県立博物館・美術館所蔵)
作者：董正烈（仲宗根眞補）
製作年：1894年（明治27年）
貝摺奉行所の絵師であった董正烈が描いた首里城跡の鳥瞰図。



参考 3-1
樹木の描写表現について葉の形状は写真 1~3・参考 2 と全く同じではないが、暈しを入れる描写は類似している。この描写表現は写真 4 にも見受けられる。

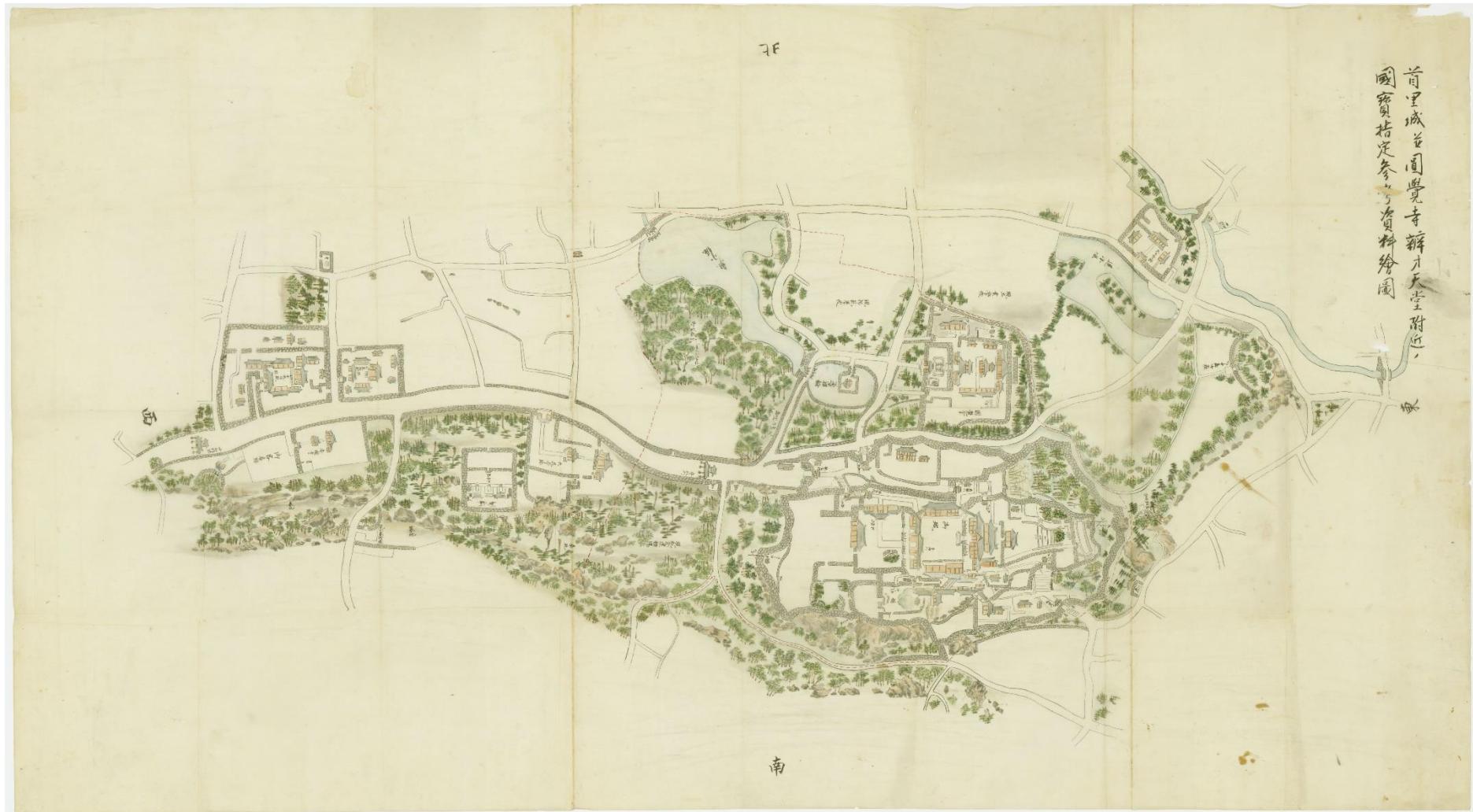


写真4 「首里城並圓覺寺辯才天堂附近ノ國寶指定参考資料繪圖」（沖縄美ら島財団所蔵）

森政三コレクション中にある首里城及び周辺施設の絵図。「國寶指定参考資料」とあり、円覚寺等が国宝指定された1933年（昭和8）以後に作成されたものと思われる。首里城正殿含めた王府の重要施設の表記は首里古地図を踏襲している。按司・士族を含めた屋敷図の表記は省略されている。

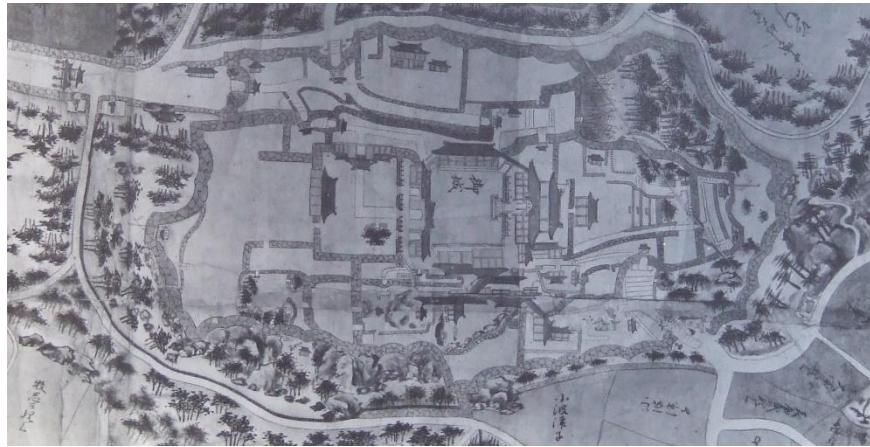
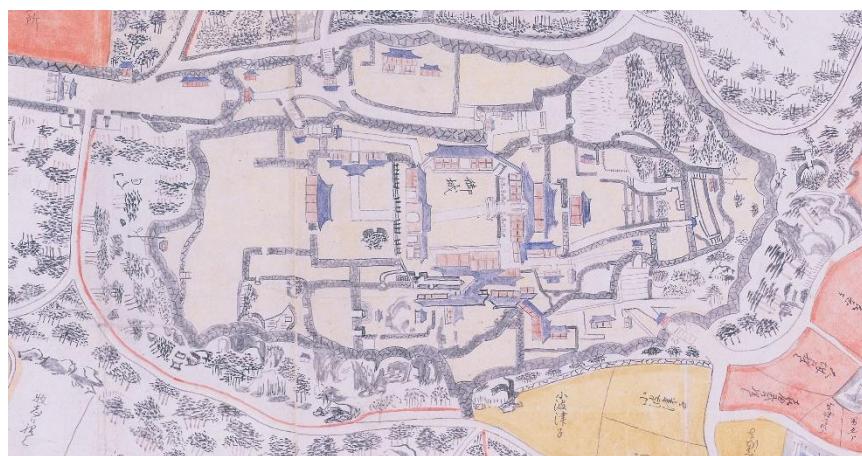


写真 3-2 森古地図首里城城郭内画像

県図古地図と建物の形状はほぼ同じ。樹木の描写表現がやや違っている。絵図の折れ、修理痕は鎌倉古地図と同じに写っており、県図古地図とは相違する。



参考 1-1 県図古地図首里城城郭内画像

写真 3-2 には、京の内・書院の東西（地図横側）に修理痕があるが、参考 1-1 にはない。逆に参考 1-1 は系図座・用物座西側に南北（地図縦側）に修理痕があるが、写真 3-2 にはない。

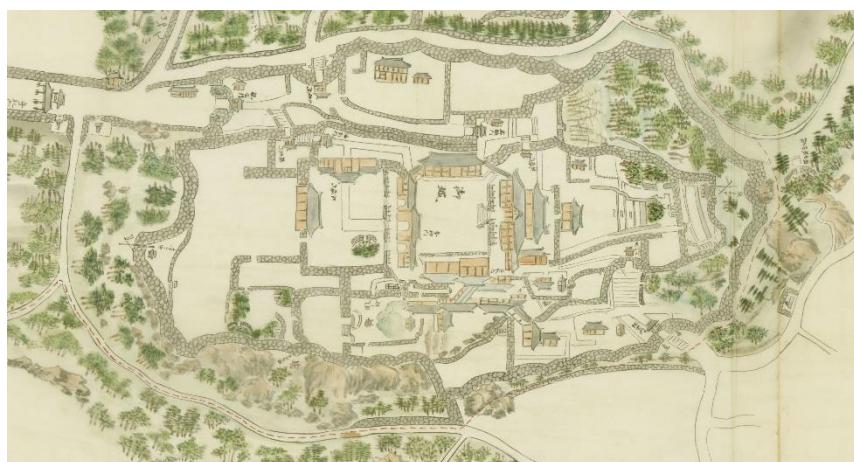


写真 4-1 国宝参考古地図

県図古地図・森古地図と建物の形状はほぼ同じ。樹木の描写は相違する。城郭内は明治期に既に撤去された首里森御嶽や奉神門等も表記され、おそらく原図を尊重した模写となっている。

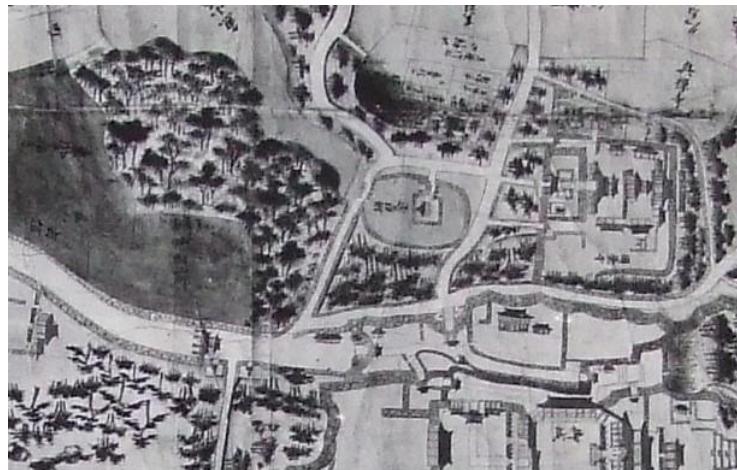
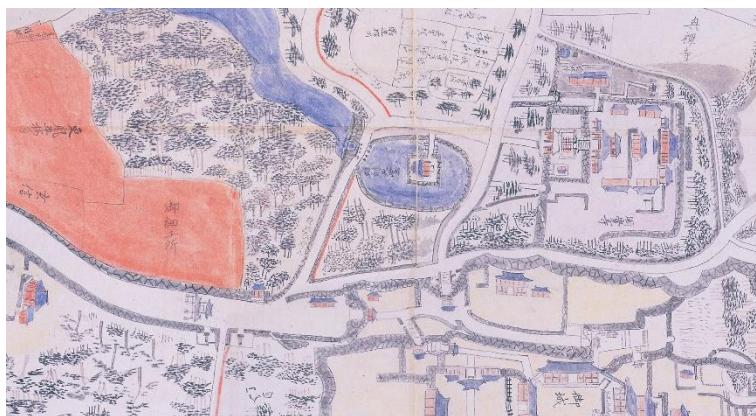


写真 3-3 森古地図円覚寺・弁財天堂・龍潭・ハンタン山部分画像

後世修理の折れ跡が円覚寺境内から外れた位置から東西に走っている。県図古地図とは折れ跡が相違する。弁財天堂北側に汚れがあるが、県図古地図には無い。龍潭西側（ハンタン山）の樹木は葉を描いた後、樹形を量した描写で県図古地図と相違しているように見える。



参考 1-2 県図古地図円覚寺・弁財天堂・龍潭・ハンタン山部分画像

後世修理痕が天女橋近くから円覚寺境内中央を東西に走っている。弁財天堂北側に森古地図のような汚れが無い。龍潭西側（ハンタン山）の樹木は葉を点描で明確に描写し量し表現は無い。

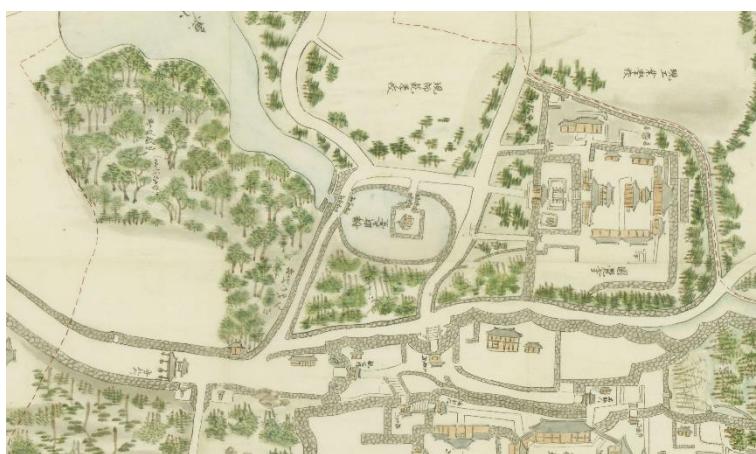


写真 4-2 国宝参考古地図

龍潭西側（ハンタン山）の樹木は葉を点描し、緑色の色材で量した描写となっている。最も新しい模写と思われる国宝参考古地図と森古地図の描写は類似する。弁財天堂・円覚寺北側に現師範学校・現工業学校とあり、表記は首里古地図を踏襲しているが昭和初期の状況を文字で記録している。

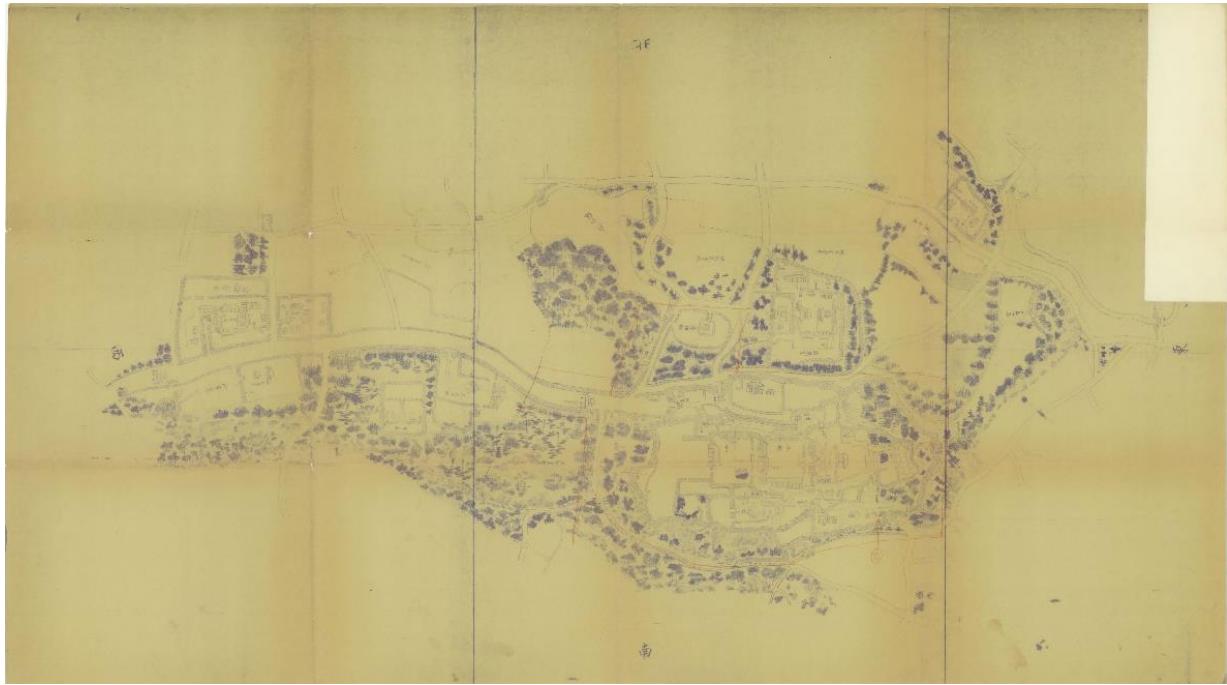


写真 5 「首里城並圓覺寺辯才天堂附近ノ國寶指定参考資料繪圖」の青写真（沖縄美ら島財団所蔵）写真 4 の国宝参考古地図を複写した図面。

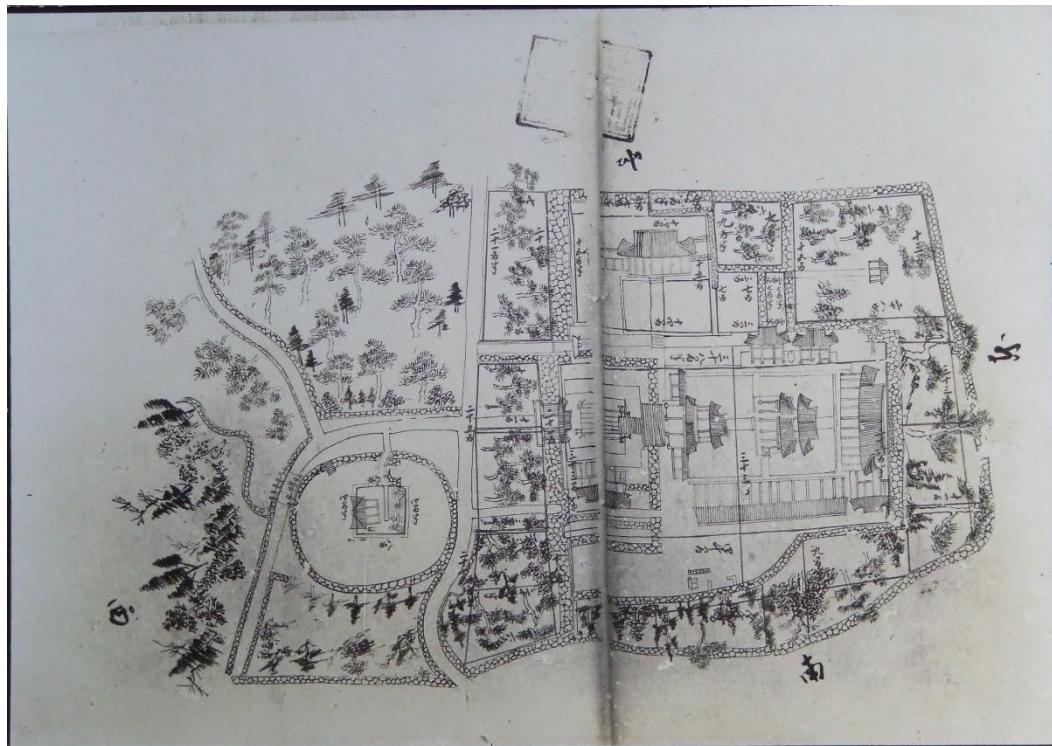


写真 6 「円覺寺弁財天堂絵図」（沖縄美ら島財団所蔵）
絵図帳となっており、円覺寺と弁財天堂が図示されている。上部中央の綴じ目に割り印が捺印されている。前近代に王府で作製された記録の可能性がある。差図帳にも円覺寺弁財天堂絵図があるが、建物等の図示が異なる部分もある。

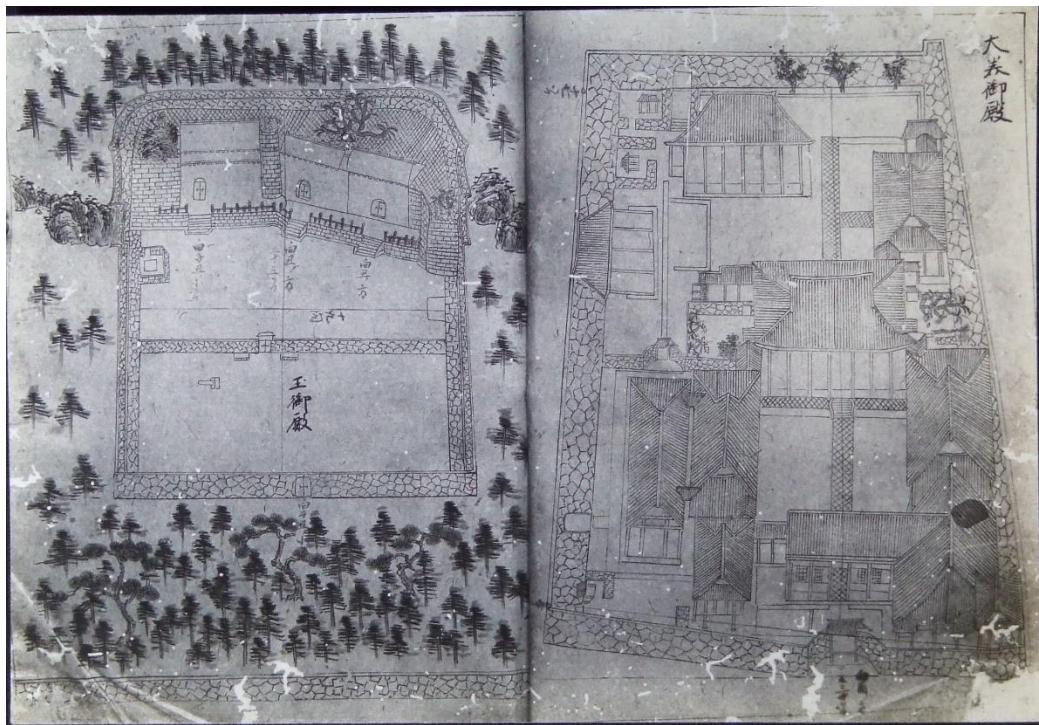


写真7 「玉御殿・大美御殿絵図」（沖縄美ら島財団所蔵）

玉御殿と大美御殿が、絵図帳の見開きで図示されている。割り印は捺印されていない。差図帳に類似の絵図がある。差図帳には本図の玉御殿から玉御殿碑の表記が省かれていた。大美御殿は石牆の図示が本図では石積の描写があるが、差図帳では石積の描写が無い。

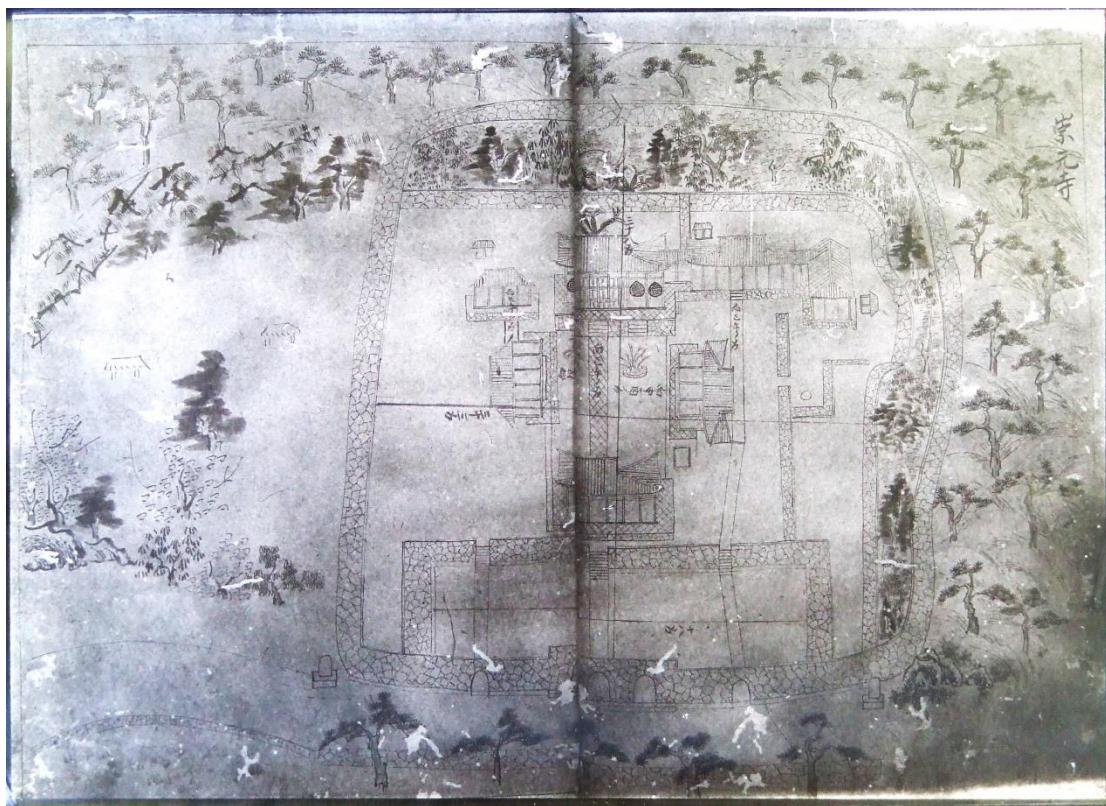


写真8 「崇元寺絵図」（沖縄美ら島財団所蔵）

崇元寺は見開きで崇元寺全体を図示している。割り印は捺印されていない。差図帳に類似の絵図がある。差図帳には本図の北側石牆や樹木の描写等が省略されている。



写真9 「森政三ノート」(個人所蔵)
野帳タイプのノートが六冊残されている。

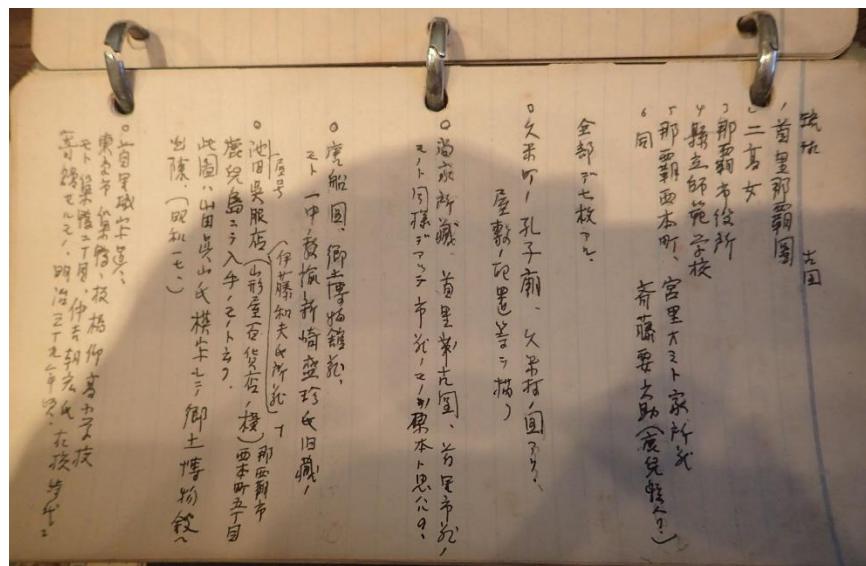


写真10 「森政三ノート」 首里古図に関するメモ
ノート中央に、「尚家所蔵 首里市ノ古図、首里市蔵ノモノト同様デアッテ市蔵ノモノノ原本ト思ハル?」とある。

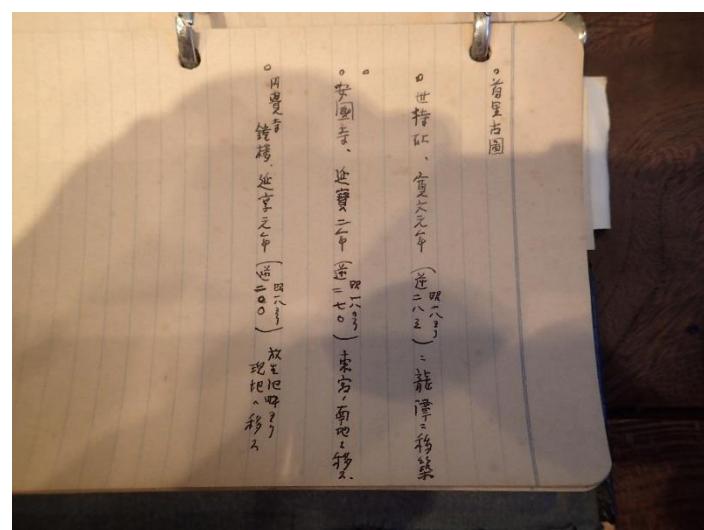


写真11 「森政三ノート」 首里古図に関するメモ
世持石(橋)、安国寺、円覚寺鐘楼の移築に関するメモ。場所については「首里古圖」という地図を基にメモしている。首里市役所蔵の首里古地図を参照したものと思われる。